

中・上級英語ライティング指導ガイド

山西博之、大年順子 編著

A5判・304頁・
本体2,800円＋税

[評者]
柏木哲也



4技能対応のライティング実践指南書

本書は、英語ライティング活動について中・上級学習者向けに指導実践例を広く紹介した指導書である。1980年代に急速な発展を遂げたライティング指導であるが、昨今は第2の波とも呼べる変革の波が押し寄せている。大学入試の4技能対応である。

そういったニーズに対応すべく、第1部の理論編では、ライティング指導の枠組みを、Why（動機・目的）＝なぜ書くのか、How（技術、方略）＝どう書くのか、What（内容、能力）＝何を書くのかの3点による順序で構成している。

第2部では、新しい視点として、多重知能（multiple intelligences; MI）理論やトゥールミン・モデル（the Toulmin model of argument）なども含め、実際の指導実績を基に、19のタスクがオムニバス形式で紹介されている。

ライティングの手段としては、オンライン掲示板やビジネスライティング用のBULATS、模範文の提示の効果などが挙げられている。構成としては、プロセス・アプローチやシーム・リームを活用した一貫性を持つ文章の書き方及

び反駁の導入、ジャンルとしては、ニュース英語、論証文、叙述文、サマリー、アブストラクトなどのタイプに関する実践例が紹介される。また、方略としては、リーディングとのリンクやピアやグループを活用した4技能対応のタスクが提案されている。さらに民間試験への対応としては、IELTS、TOEFL、英検といったニーズの高い各試験への対策が細かく説明されている。

ライティング指導において最も難しいと考えられる評価も、多くのタスクで具体的事例と方法が紹介され、セクションIVでは、ポートフォリオの導入を始めとする異なる観点からのわかりやすいループリックが、細かく提示されている。

各セクションで、「はじめに」において提示される2つの目標は、本書を読んでいく上で焦点を当てる指標になっており、同時に各章の最後にある「まとめ」は、内容を振り返る意味で大変効果的かつ、重要である。また最後に示されている“Further Readings”は、より詳しい知識を求める読者にとってはありがたい参考情報となる。一方で、各タスクにおける問題点に関する考察も含まれており、読者への問題提起も欠いてはいない。

一見オムニバスの構成ではあるが、統一された枠組みを基に、詳細に目標と方法が述べられた、実に多面的な要素を持った指導書である。中・上級学習者は元より、初級学習者を含めた全学習者、全指導者にも役に立つ実践的教育書と言えよう。

（かしわざ てつや・
北九州市立大学教授）

「育てる」教育から「育つ」教育へ

学校英文法から考える

中島平三 著／しまおほ イラスト・執筆協力

A5判・160頁・
本体1,800円＋税

[評者]
小澤賢司



英文法教育の新たな視点

英文法を題材とする最近の書籍は、昨今の教育要請に応じるためか、実用的側面を重視したものが多く。その中で、英文法の教育的側面に焦点をあて、その教育的意義や必要性、英文法の魅力などを論じたのが本書である。

本書第I部では、マホさん（著者の実際の教え子をデフォルメした人物）からの質問と称した、英語教育に関わる6つの問題に対する著者の考えが明快に述べられている。第II部では、学校英文法における種々の問題をマホさんとの対話を通して「ともに考える」形式を取っている。非常に平易な日本語で書かれているのが特徴的で、すでに教壇に立っている教師のみならず、これから教師を目指す者にとっても手に取りやすい内容となっている。

本書では、これまでに行なわれてきた、あるいは現在行なわれている教育を「正面」とし、その正面からの教育とは多少異なる視点からの教育を「斜め」とする。たとえば、enjoyやfinishのような目的語位置に動名詞を取る動詞を教える際、「正面」からでは、各動詞を個別に、あるいは語呂のようなもので教えるか、少し英語学の知見を凝らした〈現在・過去の

ことを述べる場合は動名詞」といった説明がなされるのが一般的である。しかし、avoid や miss などは、これからすることを避けたり、しそこなうわけであるから、上記の説明がときに効果的でない場合がある。そのような場合に単に「例外」といって端に追いやるのではなく、「斜め」からその問題について取り組むことで、観察力や洞察力、さらに、これからの知的基盤社会においてもっとも重要な能力の1つとされる問題解決能力が育つと主張する。

教育には、教えるという他動的な側面だけでなく、教えるつといった自動的な側面があり、後者の教育のためには良質な刺激が必要である。本書でたびたび登場する「斜め」とは、授業を活発にし、学習者の知的好奇心をくすぐる「良質な刺激」と捉えることもできよう。これまで英文法、ひいては英語を「正面」からしか見てこなかった人は、本書によって実に新鮮な学びが感受されるだろう。

本書は一貫して学校英文法を「斜め」から考えることを提案しているが、「斜め」からの視点は決して英文法だけに留まるものではない。音声の問題やことばの多義性、地域による表現の差異など、英語を学んでいるとたくさんの不思議に出会う。その不思議と出会ったときに、「正面」からだけでなく、「斜め」からその事象と向き合うことで、本当の意味でことばの面白さに気がつくことができる。本書は「斜め」からの視点のその一端を与えてくれるものであり、本書をきっかけに英語の世界を「多角的」に眺め、味わってほしいと思う。

(おざわ けんじ・日本大学助教)

「教師の自己評価」で英語授業は変わる

J-POSTL を活用した授業実践
神保尚武 監修、久村研
ほか編著

A5判・240頁・
本体2,800円＋税

[評者]
阿野幸一



英語教師の資質・能力を高め、成長するための実践記録

英語の授業改善を行うために、様々な研修会やセミナーに参加して研修を積み、授業力向上を目指している先生方はたくさんいる。しかし、公務多忙の日々の中、長期的に継続して授業改善のための努力を続けていくのは難しい場合も多い。そんな先生方の日々の研修の支えとなり、方向性を示してくれるのが本書である。

すでに大学での英語教職課程での学びや、現職教員の授業改善のための有効なツールとして定評のある「言語教師のポートフォリオ(以下 J-POSTL)」であるが、実際にどのように授業と関連付けて活用することで、英語教師としての資質向上と授業力を上げることができるかについて、具体的なイメージが湧かない先生方にはぜひ本書を手にとっていただきたい。

第1章から第4章では、「指導法の見直し」「自立学習支援」「評価法の見直し」「異文化間能力の育み」の4つの視点から、中学校と高等学校の現職教員の授業改善の取り組みが報告されている。どの事例においても、日々の授業実践と改善のための具体的な方策を紹介し、どのように J-POSTL を活用してきたかが、該当する自己

評価記述文(教師用の CAN-DO 形式の記述文)とともに示されている。国立中学校を含む公立学校から私立学校、普通科での実践から国際教養科や音楽科での指導例まで幅広く取りあげられており、県内トップの進学校での受験を意識した指導から、「学び直し」の高校での実践記録まで多岐にわたるのも、多様な学校に勤務される先生方にとって有益な点である。そして、英語科の授業に加え、特別活動「茶道」での実践也非常に興味深く、J-POSTL の活用範囲の可能性を知ることができる。

第5章では教員研修での J-POSTL の活用事例が紹介されている。校内で研修担当になり、どのように研修を進めていいか悩む先生方や管理職の先生方、そして公的な教員研修を担当する指導主事の先生方にも、課題を解決するための研修立案へのヒントを与えてくれるだろう。

新学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」については、その理念は理解しながらも、日々の授業実践の中でどのように実現するか、その具体的なイメージを持ちにくいと考える先生方も多い。そうした中、新しい学習指導要領が目指す方向と親和性が高い J-POSTL を軸とした授業実践から、これからの英語教育が目指す指導を考える機会を本書は提供してくれている。

本書は単に指導方法を紹介するだけのものではなく、指導を支える英語教師としての資質・能力を育むことの重要性を読み取ることもできる良書であることを強調しておきたい。

(あの こういち・文教大学教授)